

公益財団法人 日本中国国際教育交流協会

【2025年度の歩み 会報第32号】



2026年3月発行

目次

■巻頭言 公益財団法人日本中国国際教育交流協会 代表理事 中村武志	2
■教育交流事業	3
□教育交流・派遣事業	3
◇視察研修訪中団	
□教育交流・受入事業	24
□教育交流・支援事業	25
◇河北省保定市阜平县音楽教育支援	
2025年度教育支援に関する協定書	
2025年度実績報告関係文書	
□教育交流・研究等助成事業	30
◇第10回教育交流ホームステイ	
◇第8回日中教育文化交流シンポジウム	
◇第2回田中一郎記念奨学基金日本語作文コンクール	
◇第21回中国人の日本語作文コンクール	
■機関関係	51
(1) 2024（令和6）年度事業・会議報告	51
(2) 2024（令和6）年度事業報告	51
(3) 2025（令和7）年度事業計画	54
(4) 2025（令和7）年度収支予算書	55
(5) 2025（令和7）年度役員・評議員名簿	57
■協会の歩み	58
■編集後記	60

■表紙写真

①	②
③	④

- ① 視察研修訪中団（北京市・保定市阜平县）
 ② 第10回教育交流ホームステイ in 山梨
 ③ 第8回日中教育文化交流シンポジウム
 ④ 第2回田中一郎記念奨学基金日本語作文コンクール

巻頭言



公益財団法人日本中国国際教育交流協会

代表理事 中村 武志

公益財団法人日本中国国際教育交流協会に対しまして、日頃より多くの方々から励ましやご支援を賜っておりますこと、心から御礼申し上げます。

昨年は教育運動の要の方々の参画を得て視察研修訪中団（総勢15人）を結成し、9月23日～26日、北京と保定市阜平县を訪問することができました。各都県からの参画を得ての訪中はコロナ禍以降はじめてとなります。

北京では宋慶齡基金会の沈副主席にお会いする機会を得、これまでの交流、とりわけ音楽教育を中心とした教育交流の意義と継続の必要性など、多くのことを確認・共有することができました。

また保定市阜平县では、支援先である職業技術学校や首頭小学校を訪問することができました。職業訓練学校では部活中の学生たちからエネルギーをもらい、小学校では子どもたちの笑顔から「教育の根源的目標」を再確認することができたと思います。その後の阜平县体育局的幹部の皆さんや学校関係者の皆さん方との懇談では、貧困によって子どもの教育が奪われてはならないよう関係機関は全力を尽くさなければならないことを確認しあうとともに、子どもたちの活動の交換・交流を含めた今後の教育交流の具体について意見交換することもできました。

今回の訪中で当協会の立ち位置や目指す方向を再認識することができました。宋慶齡基金会はじめ今回の訪中にお力添えいただいたすべての方々に感謝申し上げます。

さて、依然として世界各地で友好・協調とは真逆のできごとが頻発しています。また「弱者・少数者の支援より自らの利益を追求する風潮」はより強くなっているように感じます。さらには「ちがいを豊かさに」変える営みより「ちがいを排除」の口実とする言動がより目立ってくるようにもなってきました。今とこれからの社会が「明るく豊かなもの」と言える人はどれほどいるのでしょうか。

しかし、悲観ばかりでは何も生まれてこないでしょう。教育はともに未来を語ること。笑顔でいる明日の自分、そして誰かに笑顔を届けている明日の自分を思い描く活動であるはずです。小さな小さな当協会ですが、子どもたちの笑顔を糧に、多くの人たちと力を合わせながら「交流」という形でその活動に加わり続けていきたいと考えます。「今を生きる私たちには未来を変える資格がある」ことを心に刻みながら。

最後になりましたが、今後とも、多くの教育関係団体・都道府県教育関係者の方々のより一層のご支援を賜りますことを深甚よりお願い申し上げます。

教育交流事業

中国宋慶齡基金会との「教育交流プロジェクト」の推進確認のもとに、2021年度からの5か年計画の5年次として、河北省保定市阜平县における取り組みの推進を行いました。教育交流派遣事業・支援事業・受入事業の展開へと結ぶことのできる草の根教育交流をより深く、多様に発展させることを目指して計画を進めました。2025年度は、昨年度の「役員訪中団」の取り組みのもとに、「視察研修訪中団」の派遣を行いました。「第18次教育訪中団」の実施、「第6次宋慶齡基金会教育交流代表団」の受入、「第5回音楽教育交流会」の開催等の取り組みをどう進めて行くかについて、宋慶齡基金会とより具体的な話し合いが持てました。また、今回のプロジェクトの推進地区である河北省保定市阜平县の体育教育局、職業教育訓練校、県立小学校の関係者と今後の教育交流について意見交換ができ意思確認が計れたことは大きな成果でした。結果として、教育交流派遣事業については「第18次教育訪中団」の派遣に向けて、受け入れ事業については「第6次宋慶齡基金会教育交流代表団」の受入について、教育交流の具体的内容としては「第5回音楽教育交流会」の開催等について、それぞれ関係者相互での確認を行うことができました。また、教育交流支援事業については、視察研修で確認できた楽器購入の実態のもとに、宋慶齡基金会との協議を通して、5年次となる「音楽教育支援」を行いました。教育交流研究等助成事業については、学生の語学研修のみならず、ホストファミリーを中心に日中友好、相互理解の輪をも広げてきたホームステイ事業を、「第10回教育交流ホームステイin山梨」という形で実施しました。さらに、昨年度初めて実施した、「田中一郎記念奨学基金」による、主に東南・南アジアからの留学生を対象とした、日本語作文コンクールを、「第2回田中一郎記念奨学基金日本語作文コンクール」として実施しました。「第8回日中教育文化交流シンポジウム」の開催については、第7回シンポジウムの「日中教育交流の意義について考えよう」をさらに発展させる形で、「第21回中国人の日本語作文コンクール」ともコラボした形で、日中の教育文化交流について考えました。協会が後援している「第21回中国人の日本語作文コンクール」については、例年のように作品の審査と「教育賞」受賞者の選定を行いました。また、リモートによる「第8回日中ユースフォーラム」にもコメント・討論者として参加しました。

□ 教育交流・派遣事業

今年度は、「視察研修訪中団」として、中国宋慶齡基金会と河北省保定市阜平县を訪れ、基金会においては基金部と、阜平县においては県当局、体育教育局及び教育関係者と話し合いを持つことができました。その結果として、今後の「教育交流プロジェクト」をどのように具体的に進めて行くかの確認を行うことができました。

（1）視察研修訪中団実施内容

- | | |
|---------|---|
| 1. 目的 | 協会団体会員組織を代表して参加する方々に、中国との教育交流の意義を改めて確認し、今後の交流の進め方について考える機会としていただく。 |
| 2. 訪中期間 | 2025年9月23日(火)～26日(金) 3泊4日 |
| 3. 訪問地 | 北京市及び河北省保定市阜平县 |
| 4. 訪問先 | 中国宋慶齡基金会、阜平县体育教育局・阜平县職業技術教育センター・阜平县小中学校 |
| 5. 受入機関 | 中国宋慶齡基金会 |
| 6. 宿泊場所 | 宋慶齡基金会ホテル・山水国際ホテル |
| 7. 日程 | 9月23日(火)
結団式・出発（東京／羽田）→ 北京市
7：00 集合 羽田空港出発ロビーJTBカウンター前結団式
8：55 羽田空港発（全日空NH0961便）
12：00 北京空港着
13：30 中国宋慶齡基金会ホテルチェックイン |

14：00 中国宋慶齡青少年科学文化交流センター見学
 15：30 宋慶齡故居見学（バス）
 17：00 中国宋慶齡基金会表敬訪問（故居で行う）
 ・会見（故居）
 基金会出席者（会見・晩さん会）
 沈蓓莉常務副主席
 劉穎基金部副部長
 呉東基金部項目処処長
 ・晩さん会（故居近くのレストランー孔小乙＜浙江料理＞）
 基金会出席者同上
 20：00 宋慶齡基金会ホテル泊

9月24日（水）

北京市 → 河北省保定市阜平县

7：00 朝食
 8：00 阜平县へ（バス）※およそ3時間半
 11：40 阜平县白河小学校視察、小学生合唱団視察
 12：30 昼食（山水国際ホテル）
 14：00 阜平县教育体育局との教育交流会
 15：30 阜平县職業技術教育センター視察（音楽教育実施状況・学校施設・教育扶貧展示館・国管局支援30周年展示館・実習棟他）
 18：00 夕食（山水国際ホテル）
 20：30 山水国際ホテル

9月25日（木）

河北省保定市阜平县 → 北京市

7：30 朝食（阜平县職業技術教育センター）
 8：30 北京へ（バス）
 12：00 昼食（北京市内）
 13：00 北京市内見学（天安門広場・故宮・人民大会堂・王府井他）
 18：00 夕食（宋慶齡基金会レストラン）
 20：30 宋慶齡基金会ホテル泊

9月26日（金）

北京市 → 東京／羽田空港

5：30 宋慶齡基金会ホテル出発
 6：20 出国審査 → 出発ロビー搭乗口付近で解団式
 8：20 北京空港発（全日空NH0964便）
 12：55 東京／羽田空港着
 ・入国審査後解散

8. 視察訪中団名簿

No	氏名・訪中団役割	県名	役職等
1	団 長 中村 武志	三重	日中国際教育交流協会代表理事
2	秘書長 赤岡 直人	山梨	日中国際教育交流協会業務執行理事
3	副団長 井坂 功一	茨城	茨城県教職員組合委員長
4		群馬	群馬県教職員組合書記長
5		千葉	千葉県教職員組合書記次長
6		東京	東京都公立学校教職員組合書記次長
7		神奈川	神奈川県教職員組合書記長
8		横浜	横浜市教職員組合副執行委員長
9		川崎	川崎市教職員組合執行委員長
10		富山	富山県教職員組合書記長
11		福井	福井県教職員組合執行委員長
12	副秘書長 嶋田 拓郎	山梨	山梨県教職員組合書記長
13		静岡	静岡県教職員組合副執行委員長
14		愛知	愛知県教職員組合連合会副会長
15		三重	三重県教職員組合書記次長



〔北京市内研修〕

●青年科学技術文化センター

青年科学技術文化交流センターは北京市海淀区玉園潭南路に位置する宋慶齡基金会にあり、建物の高さは46.9メートル、地上9階、地下2階建て、建物面積は80,800平方メートルを超えている。青少年科学技術文化交流センターは、中国宋慶齡基金直属の公立機関であり、体験センター、アートセンター、幼稚園教育センター、舞台芸術センター、交流センターの5つの事業部門を有している。

体験センターはメインビルの2階から4階に位置し、荘、モンゴル、崔の3つのスペースがある。子どもが科学技術、芸術、文化、スポーツ、自然教育、社会交流の6つのシステムを構築できる体験型教育プラットフォームである。体験教育を通じて、子どもの科学技術革新のインスピレーションを刺激し、子どもの多重知能の発達を促し、伝統中国文化に込められた思想、人文精神、道德規範を広め、子どもが健全な人格を育み、良い習慣を



身につけ、総合的な識字率を向上させるよう導いている。入場料は158元であり、平日は小・中学校が利用し休日は一般の人が主に利用している。

アートセンターの教室エリアは、メインビルの5階と6階、G階、子ども体育館、そして屋外のイースト1およびイースト2教室エリアに位置している。専門的な教育チームを擁し、実験・実演教育活動において芸術と教育を融合させ、子どもたちの全方位の発展を促進し、健全な心・体格・健全な人格を持つ時代の新しい人材を育成している。

幼稚園教育センターはセンターのメインビルの1階に位置し、建物面積は1,890平方メートルで、ゲームや演劇を用いて乳幼児が自学的に発見・探求できるように導いている。宋慶齡の「子どもに最も貴重なものを与える」という教育理念を守り、「幼稚園教育指針」および「3歳から6歳の子どものための学習・発達ガイド」の指導精神に従い、道德教育を最優先にし、国際および国内の幼稚園教育経験から学び、子どもたちが探究活動に参加できるようにし、子どもたちの認知能力と探究への関心を刺激している。

舞台芸術センターには、未来劇場、小劇場、展示ホール、多目的ホールの4つの会場がある。未来劇場はメインビルの1階南東側に位置し、建物面積は3,700平方メートル以上、観客席は2階建てで733人を収容できる。未来劇場は、国際的な若者文化交流、子どものアート体験、アート実践などの活動を組織・実施している。児童劇



の執筆と上演を行うために国内外の専門家や機関を組織し、子どもたちの舞台芸術前職業教育を実施し、国立芸術劇場の代表・実演・指導的役割を発揮し、国際青少年演劇キャンプにおける専門的イメージと地位を形成している。同時に、劇場は大規模な会議や映画上映、その他の事業も行い、公演会場もリースしている。

交流センターは、メインビルの7階から9階の東側に位置し、総面積は8,000平方メートルを超え、宿泊施設、会議エリア、ケータリングエリアの3つの部分に分かれ、若者交流施設を提供している。

●宋慶齡故居・宋慶齡記念館

中華人民共和国名誉主席の宋慶齡故居は、もともと醇親王府裏庭の一部で、北京市西城区後海北沿46号に位置する。ここは中国古代建築の美と近現代史を紹介する観光スポットであり、庭園は300年以上の歴史をもつ。清代には明珠邸、和珅別邸、成親王邸、そして末代皇帝溥儀の父である醇親王載灃の邸宅庭園として使用されてきた。

宋慶齡は1963年4月に当地へ移り住み、1981年5月29日に逝去するまで、ここで仕事・学習・生活を続けた。逝去後の1983年から1985年にかけて故居は記念館として改築され、全国重点文化財保護機関に指定されている。宋慶齡は、中国近代史においてきわめて重要な役割を果たした人物である。彼女は孫文の妻であるだけでなく、政治家・社会活動家として独自の活動を展開した。中国国民党と中国共産党の双方から信頼され、国家の統一と発展に大きく寄与した。特に、女性や子どもの権利向上に尽力した点は特筆に値する。「中国児童福利会」や「中国婦女連合会」の設立に関わり、社会的弱者の保護に取り組んだほか、国際的な平和運動にも積極的に参加し、世界各国の指導者と交流した。北京定住のきっかけは、中国人民政治協商会議への参加であった。上海にいた宋慶齡に北京での協力を再三求めたのは毛沢東と周恩来であり、このときの二人の直筆書簡が現在も残されている。毛沢東の手紙には、「国の建設について共に話し合いたい」との趣旨が記されていた。

1962年、周恩来総理は党と中央政府の委託を受け、自ら計画し、王府裏庭の空間を活用して新たな建築を整備した。建物は建築家・梁思成の設計によるもので、主体建築物の西側に中国風と洋風を融合させた二階建ての建物が建てられた。宋慶齡は中央政府副主席として国際交流を担い、多くの外国訪問や要人との会見を重ねた。その軌跡を示す貴重な写真が記念館内に多数展示されている。故居内の「主楼」と呼ばれる二階建ての建物は、宋慶齡が実際に仕事と生活を行った場所である。事務室、大広間、食堂、寝室などが当時の状態で保存され、ゆか



りの品々とともに公開されている。

宋慶齡は死後、名誉国家主席の称号を与えられた。故居を記念館とする構想を提案したのは周恩来であり、宋慶齡基金会設立後、その名誉主席を務めたのは鄧小平である。記念館の壁面には「宋慶齡偉大光栄的一生（偉大で栄誉ある人生）」の言葉が掲げられている。また、宋慶齡を表す枕詞として「愛国主義、民主主義、国際主義、共産主義の偉大なる戦士」という表現が必ず用いられる。今日、多くの人々が宋慶齡を尊敬し追憶するのは、彼女の高い人格と深い愛国心が広く認められているためである。宋慶齡の活動は政治家という枠を超え、社会全体に大きな影響を与えた。中国の近代化と国際化の過程において、彼女の存在は欠かすことのできないのであり、今でも多くの中国人から「国母」と呼ばれ敬愛されている。

(記録：茨城県・井坂功一 群馬県・橋本智之)

【宋慶齡基金会表敬訪問】

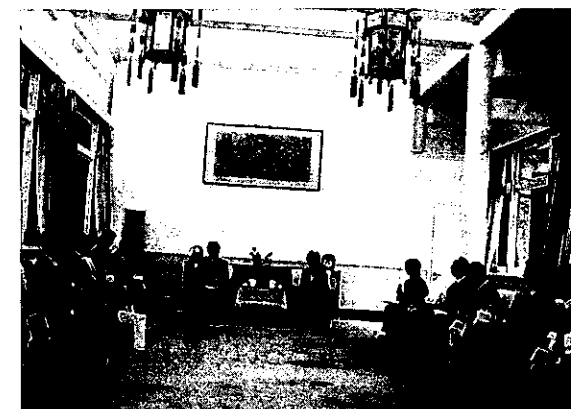
基金会の副主席、副部長2名に案内され、当時宋慶齡が会合等で使用した会議室を使わせていただいた。会談した宋慶齡故居は、庭園として300年の歴史があり、清朝の醇親王の邸宅として使われるなど歴史的な場所である。一人ひとりに名札とお茶が出されており、私たちに対する敬意を感じ取ることができた。

冒頭において、中村武志団長より挨拶がなされ、日頃から当団体の活動に理解と支援を寄せてくださっている劉部長への深い感謝が述べられた。さらに、6月18日に中国大使館で開催された孫文・宋慶齡両先生のパネル展に招待され、基金会主席と面会する機会を得たことへの謝意、そして今回の訪中に際しての多大なご配慮、新副主席ご臨席の下で意見交換の場が設けられたことに対する感謝が改めて表明された。

続いて団長は、自身の「夢」について語った。それは「孫やその仲間が常に笑顔であり、やがて誰かに笑顔を届けられる存在となること」である。三歳を迎えた孫の成長の様子を紹介し、笑顔が多い一方で、やんちゃ盛りゆえ仲間の笑顔を妨げることもあり保育士から個別指導を受けることがあることを挙げつつ、その夢の実現にはなお時間がかかるとの率直な認識を示した。

また、日本の教育事情についても言及があり、長年指摘されてきた教育分野への公的支出の少なさを背景に、政府が幼児教育の無償化や高等学校授業料の無償化を実施している現状が紹介された。しかしながら、経済格差に起因する教育格差の解消にはいまだ十分な効果を上げていないことが報告され、子どもたちの笑顔を広げる上で課題が残されている点が示された。

さらに、これまで取り組んできた音楽を中心とする教育交流が取り上げられた。音楽教育は子どもの多面的な成長を支えるものであると同時に、言語や社会習慣の違いを超えて心を通わせる力を持つことが強調され、今後も交流の主要なテーマとなるとの見解が示された。その上で、音楽教員同士の相互訪問や意見交換、さらには事業交流など、具体的な取り組みの実施に向けて検討を進めていきたいとの意向が表明された。



これらに対して、副主席からも、青少年に対する教育の大切さ、学校教育でも家庭教育でもない社会教育に力を入れていることが話された。その中でも特に印象的だったのは、子どもたちが笑顔を保てるよう、前向きな人生を歩めるようにすること

を大切にしていることを語られたことだった。実際に、この基金会の教えから有名な芸術団に入った人やりっぱな人物を何人も出しているとのことであった。

結びとして、中村団長からは、学校訪問を通じて基金会の支援の力強さ、熱量、きめ細かさを強く感じられたことを述べ、教育とは、ともに未来を語ることであり、それぞれの国の子どもの未来を語ることであり、日中国際教育交流は、子どもの未来を切り拓く大切なものであり、今後ともこの営みを続けてまいりたいと結ばれた。

今回の訪問は、宋慶齡基金会のご厚意と協力の下、教育交流の意義を再確認し、今後の具体的展開への足掛かりを得る有意義な機会となった。これからも交流を継続していくことで、日中両国の子どもたちの成長と相互理解を進めていくことへと繋がっていく。

(記録：千葉県・長島弘樹 東京都・佐谷 修)

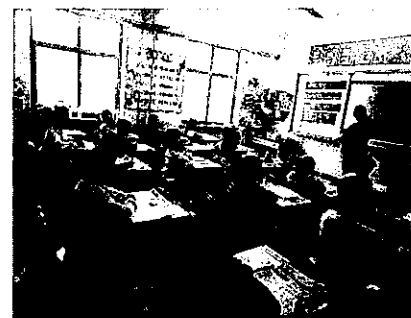


〔阜平県学校訪問〕

●岐平県山咀頭小学校視察

9月24日、中国河北省阜平県平陽鎮にある山咀頭（シャンズイトウ）小学校を訪問しました。

同校は1956年に創設され、長い歴史を有する地域の中心的教育機関であり、2014年10月に現在の校舎へ移転しました。北京市中心部から南西へ約150km、車でおよそ3時間半の場所に位置しており、周囲には山々が連なる自然豊かな地域にあります。学区人口は約3,500人で、半径2km圏内の子どもたちを対象に教育活動を行っており、現在は6クラス（各学年1クラス）、在校生147人、教職員23人（うち校長1人、専任教員18人）が在籍しています。敷地面積は約2,300㎡、建築面積は約1,850㎡と比較的コンパクトながらも、校舎内には最新の教育機器が整えられており、電子黒板を備えた7室のマルチメディア教室をはじめ、図書閲覧室、科学実験室、科学探究室、コンピューター室、音楽教室、美術教室など6つの特別教室が設置されています。さらに、全校児童が同時に食事できる240㎡の広々とした食堂も備えられており、学習環境および生活環境の双方において充実した設備が整っていました。校内には「団結・友愛・敬意」というスローガンが掲げられており、その言葉通り、教師と児童、また児童同士の上に温かい信頼関係と互いを尊重する姿勢が根づいていることがうかがえました。地域とともに歩む学校としての使命をしっかりと果たしている様子が伝わってきました。一方で、校舎内にトイレが設置されておらず、約100m離れた屋外のトイレを利用している点には、地域の生活環境や文化の違いを感じました。都市部の学校との比較においては不便にも思われますが、子どもたちはそれを当たり前のように受け入れており、自然環境と共生しながら学ぶ地域ならではの教育の形が感じられました。



3年生は、算数の授業中で、四則演算の学習が行われていました。授業は電子黒板を活用しながら進められ、教師が問題を提示し、児童が順に答える形で展開されていました。30人ほどの児童たちは皆落ち着いた態度で授業に臨み、教師の質問に積極的に発言していました。教師は児童の理解度や反応を丁寧に観察し、必要に応じて説明を補足したり、発言を促したりするなど、個々の学びを大切にされた指導を行っていました。授業全体の雰囲気は非常に穏やかで集中しており、児童が安心して学べる環境が整っていました。

ICTの活用によって、児童が視覚的に理解しやすい工夫も見られ、基礎的な演算力の定着だけでなく、思考力や理解力を深める授業づくりが意識されていました。教師が児童の発言や表情から理解の程度を判断し、全体での確認や個別の補足を行うなど、柔軟で対話的な指導が行われていた点も印象的でした。授業の進め方や児童と教師の関わり方は、日本の一斉授業のスタイルにも通じるもので、互いに学び合う温かな雰囲気が感じられました。

全体を通して、山咀頭小学校は、地方にありながらも設備の整備やICT教育の推進など、時代に即した教育を積極的に取り入れている一方で、地域に根ざした人間教育を大切にしている学校であると強く印象づけられました。近代的な教育環境と伝統的な地域文化が共存する姿は非常に興味深く、教育の本質について考えさせられる貴重な訪問となりました。

●山咀頭小学校合唱団

訪問時には、2年生から6年生までの21人の子どもたちで構成されている「合唱団」が、校舎2階の音楽室で、そろいの衣装とすてきな笑顔で私たち視察団を迎え入れてくれました。合唱団は、2曲の歌を披露してくれました。1曲目は、我々を歓迎する意味もあったのだと思いますが、日本の歌謡曲「北国の春」でした。子どもたちの歌う表情は真剣そのもので、体を揺らしたり、何人かは打楽器も演奏したりしながらも、先生の指揮を真っすぐ見つめて歌っており、集中していることがよく伝わってきました。子どもたちにとっては、見知らぬ異国の大人たちに囲まれ、写真も撮られるという緊張して当然の状況で、練習通りの発表をするというのは、とても難しいことだったと思います。途中「ズレた」と思う瞬間がありましたが、指揮をよく見ていたためか、すぐに修正できたのには感心しました。



彼らには、日頃の練習の成果を披露する機会があると聞きました。地域のフェスティバルといった行事などで発表してきた実績があるらしく、そのような経験がこの日も生かされていたのかもしれませんが。学校のいわゆる「時間割り」の中で、15～17時が「サークル活動」の時間となっていて、「合唱団」の練習は週2回程度という説明も伺いました。年間スケジュールの中で、計画的に練習を積み上げているのだと思います。

「合唱」においても電子黒板が活用されていました。音楽室の前壁面にモニターが設置されていて、伴奏音源はタッチパネルを操作することで流されていました。街の中心部から相当離れた地域にある小さな学校において、「電子黒板」というデジタル教育機器が日常的に活用されていることに驚きました。

学習環境としての音楽室内を改めて見てみると、壁面には子どもの学習意欲を喚起するためのカラフルな音符やキャラクターが貼られ、加えて音楽の学習目標らしきものも掲げられていました。その言葉を訳してみると「想像力を羽ばたかせよう」「歌で披露するのは素晴らしい」「音符を使って新しい雰囲気を広げる」という内容のものであった。また、棚の中には楽器等の学習用具がきれいに整理されて納められていた。ただ、私がイメージする音楽室には「鉄琴」「木琴」といった大型の楽器が壁際に数台並んで置かれているのだが、山咀頭小学校ではそれが見られませんでした。



音楽室内の楽器で目立っていたのは「ドラムセット」です。当「日中国際教育交流協会」が贈呈したものでした。ドラムは大勢の子どもと一緒に演奏して楽しむという類いのものではないが、身近に楽器があることで子どもたちは「叩いてみたい」という気持ちになるのは間違いないし、その他の楽器演奏はもちろん、音楽全体に対する興味・関心・意欲を高めるきっかけになっているのだろうと感じました。このことは、当協会の支援によって「音楽の授業が楽しくなった」「サークル活動が盛んになった」という学校長の話からもうかがい知ることができました。

「合唱」参観後の関係者との懇談において、「音楽」を通じた日中の子どもたちの交流について、今後前向きに検討していくことが話題となりました。実現すれば、教育的にたいへん意義のあることで、将来の世界平和にもつながる可能性を感じさせる交流になると思います。「音楽は世界の共通語」という言葉を聞いたことがあります。この言葉の意味するところは、「歌詞の意味は分からなくとも、リズムやメロディー、演奏者の表情や熱量などは、国籍や年齢をはじめとする人間の属性やバックグラウンドを超えて、心に響くものである」というものだと考えます。加えて音楽は、聴いたり歌ったり奏でたりすることによって、その曲の作詞・作曲者や演奏者が属する地域等の文化を感じることもできます。つまり音楽は、言葉や国籍といった壁を越えて、お互いを理解するために有効なツールといえるのではないのでしょうか。

今回、歌の発表を聴かせてくれた合唱団の様子や、屈託のない笑顔を見せてくれた山咀頭小学校の子どもたちの姿を見て、若年層への国際理解教育の重要性や有効性を一層感じることができました。

●阜平県教育体育局との教育交流会

午後には、阜平県教育体育局との教育懇談会が行われました。双方の自己紹介後、教育体育局からは、阜平県の教育に関する現状説明を受けました。教育の向上を重要な任務として進めるために、教職員の質の向上や企業との連携などのとりくみを進めているとのことでした。続いて、支援金にて購入した楽器類を利用した教育活動についての説明があり、各小学校長からは、放課後支援施策である「児童の家」についての様子や、音楽教育の充実についての報告がありました。これらの話を受け、中村団長からは、今回の訪問を受け入れてくださったことへの謝辞とともに、日本の公教育における課題についての話がありました。赤岡秘書長からは、これまでの教育交流に関する経過と成果について、また、今後の更なる充実を願う声とともに、音楽を通しての日中間における児童交流についての提案がありました。その後、当協会の参加者から、4点の質問があげられました。

① 障害児教育の様子について

⇒ 中国には、障害のある児童のために特色教育学校が全国にあり、障害の内容や年齢に応じ、文化的な知識やこれからの生活に役立つ技術などを学ぶ学校となっている。

② 電子黒板を駆使しながら指導されていることに驚いた

⇒ 阜平県のように経済的に恵まれてなくても、国からの支援も受け、学校が一番良い施設であり子どもたちの教育に力を入れている。電子黒板がインターネットにも通じることで、国内の優秀な教育に繋げることができる。今後は、日本と中国で授業を通じた交流も行いたい。

③ 15年ぶりに当協会の訪中団として参加し、まず、国や教育の変化に驚いている。15～17時はサークル活動として子どもたちの自主的なとりくみに力を入れていると聞いた。それには施設面の充実も大事だが、何より人が大事だと思う。それらを踏まえ、教職員の研究や研修システムはどのようになっているのか

⇒ サークル活動は、2023年から全国展開をしている。阜平県では、合唱団の子どもたちがオリンピックで輝いてから、さらに発展させる方法について考え、教師の研修に力を入れている。また、毎年教師の大会を開催することにより、教師自身が能力を上げていくことに力を注いでいる。

④ 英語教育の実態について

⇒ 小学校3年生から英語教育を始めている。簡単な会話ができる程度の教育である。また高校生の中には、語学力をつけることが将来的にも役立つため、日本語を学ぶ生徒が増えている。

最後に、阜平県教育体育局から「教育は世界を、心を繋ぐ架け橋である」との言葉がありましたが、まさにその通りだと感じました。不穏な世界情勢ではあるが、国や人種、性別などに関わらず、教育は全ての子どもへ平等に与えられるべきです。私たち教員には、子ども達の学力向上だけでなく、人間としての心を育てる役割があります。ひとりの教員として改めて重要な役割を担っていることを自覚する機会となりました。

●阜平県職業技術教育センター視察

その後、阜平県職業技術教育センターを訪れました。阜平県職業技術教育センターは、1983年、政府の「農村の学校教育の強化と改革に関する通知」を受けて、農村発展と農村教育の問題を解決するために、河北省と阜平県が職業教育資源を集中させて設立した職業教育学校です。2000年には県内の各種職業訓練を統括するようになり、「移動教室」や「オンライン教室」も開設され、定点教育、移動教育、教室教育、家庭教育、農村教育が融合され、県全体を網羅したネットワークが構築されました。現在は中学生、高校生、大人が学ぶ職業教育の学校になっており、学生が政府と協賛企業の支援を受けてさまざまな技術を学んでいました。

バスから降りると多くの学生に迎えられました。案内の方から「教育は貧困から脱するために重要であり、そのための手段の一つが職業教育である」という説明を受けました。

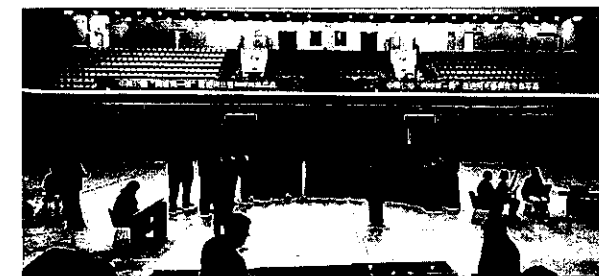
最初に、敷地内にある「国管局支援30周年展示館」「教育扶貧展示館」を訪れました。入り口を入るとすぐに、中国国家主席の写真と「阜平県に対する思い」が大きなパネルで展示されていました。その先には、政府と協賛企業の支援を受けて新しい校舎の建設や栽培産業、被服産業、自動車産業、電



子・電気工学産業などさまざまな産業種の技術を教えてきたことなどが説明されており、これらの教育により県やその子どもたちが「貧困から脱出」できたことが強調されていました。「貧困から脱出した人たち」として多くの子どもたちの写真も展示されていました。同施設に、マランカ合唱団についての展示もありました。展示によると、鄧小欄先生が馬欄村を訪れたときに村の子どもたちと合唱をしようとしたが、ほとんどの子どもたちが合唱することができず、子どもたちが基礎的な音楽教育を受けていないことに悲しみを覚え、その後、鄧小欄先生は馬欄小学校にバイオリンやアコーディオンを寄贈し、ボランティアとして子どもたちを指導したとのことでした。2006年にはマランカ合唱団を結成し、音楽家と協力して馬欄村の歌を制作しました。この歌は中央テレビでも紹介され、また2013年8月に馬欄村近郊の溪谷で第1回「馬欄子ども音楽祭 馬欄森林コンサート」が開催されました。2022年の北京冬季オリンピックでは合唱団が賛歌を披露しました。これらの行動によりマランカ村の子どもたちは貧困から脱出できたとのことでした。

次に実習棟（自動車訓練棟）を訪れました。実習棟には自動車が数台あり、中には分解されている車もありました。大会にむけての練習のために、学生が自動車の部品を分解したりパソコンと向き合ったりして真剣にとりくんでいる姿を見ることができました。ここでも、協賛企業と連携して技術を学び、職に結び付け、「貧困から脱出」することを目的に教育を行っているとの説明がありました。また、学生の授業料はすべて国からの補助金とのことでした。

最後に、バスケットボールコートがある建物に案内されました。建物に入ると予想に反して、学生たちが整然と並んでおり、コンサートが行われるような雰囲気でした。私たち視察団のために、軽音楽、合唱、民族楽器での演奏、和太鼓での演奏が順番に披露されました。民族楽器の演奏に使われた「揚琴（ヤンキン）」は中国の民族楽器で打楽器であり、江戸時代に日本にも伝来したそうですが、現在はその姿を消してしまったとのことでした。今回の演奏で使われた揚琴は、当協会の寄付により購入されたものであると演奏後に紹介がありました。その話を聞いた秘書長の赤岡さんが嬉しそうに揚琴を引いている姿がとても印象的であり、当協会の活動が中国の子どもたちの教育に貢献していることを実感できました。



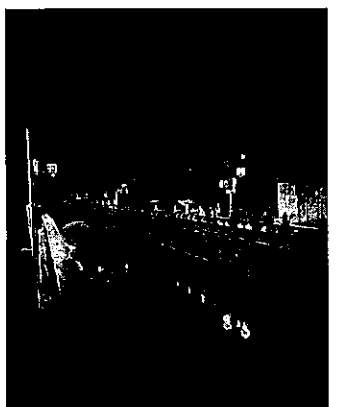
資料館見学や説明を聞いて感じたことは、中国は農村部と都市部での教育格差が大きく、農村部では十分な教育が行われていませんでした。そのため政府が予算を投入して、企業と協力しながら農村部に職業訓練校を設立し、企業が持つ技術を学生に学ばせることで、身に着けた技術を生かした職に就いてもらい、国の発展に寄与するという政策をとっていることが分かりました。農村出身者が技術を学び職に就くことを、サクセスストーリーとして紹介し、「貧困から脱出」というスローガンで周知している。日本でも貧富の差による教育格差が言われるようになっていきます。すべての子どもたちが等しく教育を受けることができるように、政府の支援を求めていきたいと改めて思いました。

（記録：川崎市・石村卓也 福井県・谷口倫章 横浜市・石高睦月 富山県・門廻宏昭 神奈川県・北村智之）

〔阜平県研修記録1〕

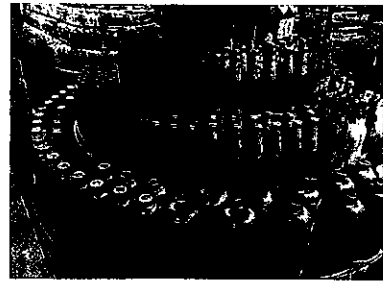
「数十年前に比べると見違えるほど綺麗になった」と、どなたかがおっしゃっていたが、国をあげてとりくんだ成果なのであろうか、北京市内の主要道路は整備され、周辺にゴミが落ちていることもなかった。ただ、車のクラクションの多さには驚いた。道路は車で溢れかえり、路上駐車（決して違法ではなく）も延々と続いているが、北京の人口は2,000万人以上というから無理もないのだろう。自己主張することが必然な環境を感じた。

景色が一変したのは宋慶齡故居に行く際に目にした北京郊外の胡同（フートン）である。細い路地が入り組んだ光景や暮らしの様子が色濃く伝わってくる様子を目を奪われた。個人的には、浅田次郎氏の小説「蒼穹の昴」のファンで、その世界が蘇ってきたこともあり、なおさら印象深いものであった。人々の様子も北京中心部とはやや異なり、いわゆる「地元の人」といった感じが伝わってくる。家の外では



何人かが集まって、麻雀であろうか、卓を囲って賑わっている。そんな光景がいたるところにあり、もう少し散策してみたい気持ちに駆られた。帰り道は、故居の前の広い池と柳の木が心地よい風に揺られ、何色かの街燈もあいまって幻想的な雰囲気であった。

北京から阜平県に向かうまでの高速道路は、ひたすらほぼ直線であった。居住区と開発区等がはっきりと分かれていることも国の特徴なのであろう。高速道路になると車もさほど多くはなくサービスエリアも同様に閑散としていた。道中の山々に太陽光発電のパネルが多く設置されていたのが印象的であった。



都市部と郊外の環境差は歴然としている印象だが、説明によると国策により改善されてきているものと思われる。むしろ阜平県のショッピングセンターは品数が豊富で目を見張った。時間があればゆっくり買い物をしたかったが、流通が郊外まで行きわたっているを感じた。このショッピングセンターでは荷物の預かり（万引き防止からか入り口でカバン等は預かり最小限の手荷物にする）からレジの場所まで、店員さんが本当に親切にサポートしてくれた。郊外の山間部に来て、よりいっそう人の温もりを感じた瞬間であった。

もう一つ印象に残ったのは、天安門広場や人民大会堂などを見学した際に感じた、「働いている公務員の若さ」である。いわゆる青年層の公務員がとても多いことに気づいた。中国の若者にとって魅力的な職業であり人気も高いことが推察される。一方で、年齢バランスも気になったところではあるが。日本では教職員不足のみならず公務における人材確保が課題となっている中、うらやましくも感じた。

最後に、北京中心部のお土産屋で、ようやくクレジットカードを使うことができた。買い物の支払い方法は、場所や店の形態によって様々であり今回は苦戦してしまった。それでも、これも一つのよい思い出となり、レシートや紙幣を北京名物の月餅とともに持ち帰った。

〔阜平県研修記録2〕



まず驚いたのが車の多さであったが、国をあげてとりくんでいるからか、空気の濁りや排ガスによる煙たさなどは一切感じなかった。また、交通網も整備されており、道路も広い印象を受けたが、それ以上に車やバイクの多さに驚かされた。

阜平県は山間部が多い印象で、農村地域という印象を受けた。車窓から見える一面のとうもろこし畑に迎えられ、学校施設の見学に向かったが、中心部（北京など）に比べると車通りもそれほど多くない印象であった。

中国の方に阜平県の方の印象を聞くと、「真面目で純朴」いう答えが返ってきた。私たちに丁寧に対応してくださったことが印象深い。また、教育に対しては「勉強＝人生を変える手段」という意識があるということで、家庭や学校、行政が一体となって教育に力を入れている様子がひしひしと伝わってきた。子どもたちの授業中の様子を見ていても、真剣さが伝わってくるものであった。私語がなく、先生の一举手一投足に注目し、聞き逃さないようにしている様子であった。

北京郊外の胡同では少しの時間ではあったが、北京の伝統的な生活空間に触れることができた。細い路地を歩きながら、地元の人々の日常生活の様子を垣間見ることができ、時間が止まったかのような感覚に浸ることができた。

宿泊したホテルの周辺をはじめ、ゴミが全くと言っていいほど落ちておらず、整然としていた。環境整備一つとっても役割分担がはっきりとしており、中国の方々の勤勉さを垣間見ることが出来た。また、朝方には太極拳を集団で行う姿や、体操を行う姿なども見られた。

都市部と郊外との差はあれども、国策によって改善されているようである。いずれにしても店先で出会う方々が親切に丁寧に対応してくださったおかげで、心地よい時間を過ごすことが出来たし、支払いの方法の違いなどがあっても、異国の地での買い物をを行うことが出来た。



（記録：山梨県・嶋田拓郎 静岡県・舘 一徹）

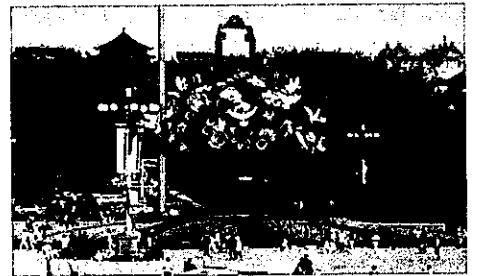
〔北京市内視察研修〕

●天安門広場

44万平方メートルに及ぶ世界最大規模の都市広場であり、人民英雄記念碑、人民大会堂、毛沢東主席記念堂などといった中国の歴史・政治にかかわる建物がある。1949年に毛沢東が中華人民共和国の建国宣言をここで行ったため、中国のシンボルとなっている。

わたしたちが訪れた昼過ぎには国内外問わず多くの人が並んでいた。団体入場口を利用したため、比較的すんなり入場できたが、一般の入場口では1時間は待つのではないと思うほどの行列であった。

広場に入場してみると、あの入口に密集した観光客はどこに行ったのかと思うほど広がった。すべての建造物を見ることは時間の都合上叶わなかったが、政治と歴史が融合したその壮大な風景に、ただただ荘厳さを感じた。また、国慶節を迎えるにあたり、巨大な花のモニュメントなども整備され、とてもきれいな広場であった。天安門は、よくテレビでも見る毛沢東初代国家主席の肖像画が飾られており、あれ縦約6mの絵画であることに驚いた。



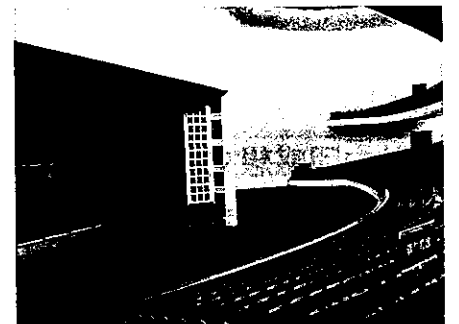
●人民大会堂



天安門広場の西に位置する人民大会堂は、毎年3月に行われる全国人民代表大会（全人代）がこの人民大会堂で行われ、日本でいう国会議事堂のようなところである。1958年、中華人民共和国の建国10年を記念して建てられ、2024年には、天安門広場およびその建築群として世界文化遺産に登録されている。当時わずか10ヶ月という短い期間でボランティアの手によって建造された。現在は100元札の図柄に用いられている。貴重な建造物の見学のため、まず入場に関するセキュリティがとても高かった。すべての荷物を、かばんの中、ポケットの中くまなく確認され、水分を持ち込むことも禁止

された。空港検閲より厳しいのではないかと感じたほどである。中に入ってみると、まずエントランスホールの広さに驚いた。何千人と収容可能なその広さの理由は、全人代の日が雨天時に利用するとのことであった。各省庁が使う会議場も一部見学ができた。湖南、四川、上海など、それぞれの間に中国の行政区分にちなんだ名前が付けられ、それぞれの地域の風土にちなんだ大きな絵画が飾られていた。すべての会議場を直接見ることはかなわなかったが、最後の地下通路ですべての間の全体像の写真が飾られており、霧がかかった神秘的な山々の風景画から、上海タワーを中心とした美しい夜景を切り取った絵画まであり、その省庁ごとの特徴を表していた。

全人代の会場となる万人大会堂は、その広さと雰囲気圧巻であった。ここに人が集まり、国のすべてを決めていくと考え、感慨深い気持ちであった。人民大会堂にあるすべての絵画、通路、扉など、どれをとっても1つ1つスケールが大きく、大きな建造物の象徴する価値が高いのだと感じた。



●紫禁城（故宮博物館）

1406年、明時代に南京から北京に遷都した際に竣工した皇帝の宮殿であり、清時代に損壊したものの復興して今日に至っている。約490年間、皇帝の居城として実際に使われ。現存する皇居で最も完璧に残っている最大規模の木造建築群であり、1987年ユネスコ世界遺産に登録された。東京ドーム15個分に相当する広さのため、しっかり内部を見て回ると一日かかると言われているが、わたしたちは滞在時間が1時間程度しかなかったため、宝物館の中などを見ることが叶わずかなり速足で建物のみを見る形であったが、ガイドの方が1つ1つ丁寧に説明してくださった。

まず「紫禁城」の名前の由来から説明をいただいた。『紫』とは、天帝が住んでいるとされる北極星を紫の星

と呼ぶことから、天の神と一緒に生きるということ、『禁』はその漢字の通り庶民が自由に入ること禁じること、この二つの意味を合わせているとのことだった。また部屋数は999.5室という計算で、これは「1万」という数字が究極であり天に属するという考え方から、皇帝は天帝を超えないがその領域にとっても近い存在であるという象徴的な数字だとうかがった。これらの説明から、いかに当時の皇帝が崇拝されていたかがうかがえた。

中に入ってみると、天安門広場から見ていたときには想像できない広さであった。門にも通れる区分があり、特に中央の石畳は当時の皇帝しか歩くことを許されず、死刑の罰則であるというお話に一瞬足がすくんでしまった。その歴史の深さを感じることができた。まず目の前に現れた「太和殿」はとてもスケールが大きく、優美であった。大きな行事などはこの宮殿で行われ、いわば皇帝の仕事場ということだった。その後も大きな宮殿がいくつも登場し、見るたびにそのスケールに圧倒された。また日本の狛犬のような獅子の守り神もあり、すべて青銅でできている貴重なものであると説明

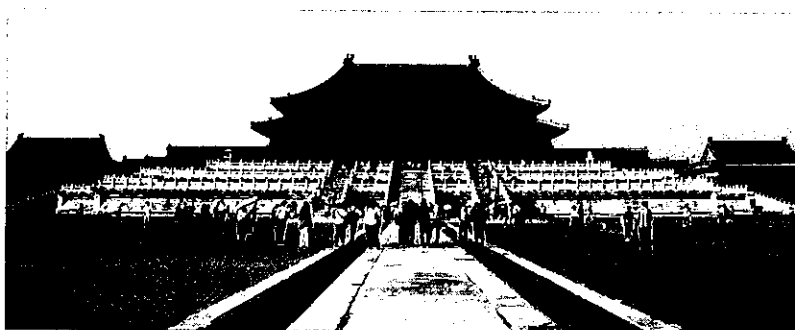


いただいた。オスは玉を掌握し、メスは子どもを掌握するという、昔の考え方を表した獅子であった。奥に行くと「御花園」という昔の遊び場があり、まるで公園であった。木々や花々にあふれ、美しい庭園であった。

今回はまっすぐ歩いただけであったが、それでも相当な距離があったように感じた。人民大会堂同様、広さ、大きさが、昔から権力の象徴であるのだなと感じた。

●視察研修を終えて…

中国の建造物の優美さ、大きさに、ただただ感嘆の声が出るばかりであった。また、中国の文化にふれ、歴史を学びなおし、あらためて日中の関係を考えるきっかけとなった。日中国交正常化から50年以上経つが、歴史の関係上、さまざまな考え方をもつ方もまだまだいると感じている。しかし、いがみ合っても何も生まれない。偏った歴史認識となることなく、これからも日本と中国が友好な関係であり、互いに尊重しあえる関係でありたいと強く感じた。



(記録：愛知県・松崎大河 三重県・出口恵梨子)

【訪中国感想文】

阜平県白河小学校視察を通じて見た現代中国教育の姿

茨城県 井坂 功一

中国には数千年にわたる教育の歴史があり、「教育は社会階層を越える手段である」という理念を社会に深く浸透させた官僚登用試験、いわゆる科举制度が特徴であった。20世紀には、国の近代化と社会主義建設を進めるために教育制度が再編され、現在では質の高い人材育成が国家目標となっている。教育への投資は飛躍的に増加し、国際社会との交流も活発化しており、海外の教育システムから積極的に学ぶ姿勢も強まってきた。

一方で、中国は広大な国土と地域の多様性を有するため、教育における地域間格差が依然として大きな課題である。特に都市部と農村部では教育資源や教育の質に大きな差があり、政府は格差是正に向け、農村部への教育投資や教員派遣などの政策を進めている。今回の阜平県白河小学校視察は、こうした課題やとりくみを現地で確認できる、大変興味深い機会であった。

阜平県白河小学校の視察は、まさに「生の中国」「生の教育」に触れる貴重な体験となった。白河小学校は貧困農村地域に位置しており、視察前は必要最低限の設備しか整っていないのではないかという先入観を抱いていた。しかし、通訳の説明によれば、タブレット端末を活用した授業やプログラミング学習が導入されており、ほとんどの教室には高性能電子黒板が整備されていた。こうした状況から、中国における高度なIT教育の推進を強く実感した。

校庭に掲示されていた教育方針には、「教育は社会主義人民に奉仕するものであり ～中略～ 人民に奉仕する生産労働と社会实践を組み合わせる育成する ～中略～ 中国の特色ある社会主義の建設者を育てる ～中略～」と記されていた。歴史的背景や経済発展の過程から形成された中国独自の社会構造を踏まえると、農村部であっても、科学技術の発展を支えるイノベーション人材、社会主義的価値観をもつ国民、国際競争力のある人材を学校教育によって育成していこうとする姿勢が徹底されていることを実感した。

また、国家の財源投入だけでなく、バイドゥ (Baidu)、アリババ (Alibaba)、テンセント (Tencent)、ファーウェイ (HUAWEI) など、中国のIT産業を牽引してきた大企業による資金援助も、社会主義国家建設の大きな推進力となっている。国家と大企業による強力な教育支援を踏まえれば、文化・産業・経済・教育・国際交流などあらゆる分野で、中国がアジアの新たな中心となっていくことは自然な流れであろう。今後、教育格差の是正がさらに進み、社会主義国家建設に寄与する教育が一層推進されれば、中国政府が掲げる「社会主義現代化強国」の実現は早期に可能となるだろう。

近年、日本国内では「中国の軍事力増強や海洋進出が日本の安全保障上の懸念を高めている」との報道が多く、特に台湾問題は日中関係に大きな影響を及ぼしている。2025年11月には、高市早苗総理が国会で台湾有事の際に日本が「存立危機事態」に該当し得ると発言し、中国側が強く反発した。このように、日中間の政治的な軋轢による緊張が高まり、国際化の進展やアジア地域の重要性が一層増す今こそ、これまで両国で培われてきた教育分野における交流の歴史を踏まえ、そのとりくみをさらに強化すべきである。平和で友好的な日中関係を築くためにも、そして今回の視察のように中国の教育や文化への理解を深めるためにも、今後も実りある教育交流・視察研修が継続されることを強く望む。



視察団参加の感想

群馬県 橋本 智之

今回、9月23日(火)～26日(金)の3泊4日で日本中国国際教育交流協会の視察研修に参加させていただいた。入国審査を済ませた後、北京首都国際空港から中国宋慶齡基金会のホテルへと向かったが、環境整備が進んでいた。聞くところによると、2010年代に入って環境対策を強化するようになり、排ガス規制のために電気自動車を推進するようになったということである。北京市内で走っているバイクは電動だけであった。清掃車も頻繁に見かけた。青少年センター視察後に、宋慶齡故居へと向かった。近代的なビルが立ち並ぶ中、バスは進んだ。宋慶齡故居が近づいてくると四合院が立ち並ぶ伝統的な街並みが広がっていた。バスを降りると胡同(フートン)と呼ばれる伝統的な路地が広がっていて北京の伝統と現代が調和した雰囲気を感じることができた。宋慶齡故居は、美しい庭園が広がっており庭園の中には清朝時代の伝統的な建物が厳かに並んでいた。資料館に入ると宋慶齡に関する資料が展示されていて激動の時代を生き抜いた宋慶齡の生涯を





感じることができ、特に北京駅に着いた宋慶齡を毛沢東が出迎える様子を表した資料が印象に残った。

24日は、阜平県に向かい午前中は小学校の視察をした。小学校は農村部にあり小規模の学校であったが、教室には電子黒板が設置されており先生は巧みに電子黒板を操作してICT教育が進んでいると感じた。授業中、児童は静かに先生の話聞いていたが、休み時間にはこちらに笑顔で手を振ってくれるなど授業と休み時間との切り替えができていた。また、小学校の管理職との懇談の中で、中国全土で15時～17時はサークルの時間に指定さ

れていることが分かった。午後は、阜平県教育体育局との教育交流会を行い、その後は阜平県職業技術教育センターを視察した。

25日は北京へ戻り人民大会堂、天安門広場、故宮を見学した。人民大会堂では、10,000席を備えた大会議場の大きさに圧倒された。天安門広場では至るところに武装警察官が配備され直立不動で警備にあたっていた。中華人民共和国の中心的な場所を訪れることができたことは、社会科教師として感慨深いものがあった。最後は故宮を見学し、広大な敷地内に荘厳な建物が無数に立ち並ぶ姿には、スケールの大きさ驚いたというより言葉がなかった。中身の濃い4日間を過ごすことができたことに感謝するとともに、この経験をしっかりと消化して今後に生かしていきたい。



視察研修訪中国の体験を通して

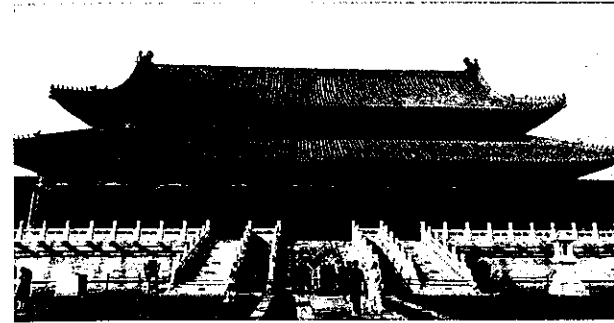
千葉県 長島 弘樹

私はこの視察研修を通して、自分が「いかに無知であるか」ということを知った。それは、宋慶齡基金会の存在、中国が貧しい地区へ対してどのような国策を施しているか、天安門広場の意義など、挙げればたくさんあるが、4日間の視察研修の中で、私の中で特に印象的だったことを中心に感想をまとめていく。

それは、2日目の小学校訪問。私が訪れたのは、中国が掲げる貧困脱退のとりくみにおいて、山村の学校の教育に力をいれて、その地域ごと活性化させている地区であった。北京のホテルからバスで揺られること3時間半。「こんなところに学校はあるの?」と不安になった。バスが着くと、そこには私が想像していた学校(いわゆる日本の小学校)とは異なる建物があった。全校150人弱。校舎内外を問わず、いたるところへ格言のようなスローガンのような文字が掲示されている。国を通じて教育に力を入れていることが見て取れた。

実際に授業風景も参観させていただいた。25人くらいが、教室内で必死に読み書きしている。私語は全くない。皆一生懸命に取り組んでおり、ふざけている様子は見受けられなかった。驚いたのは、全教室に電子黒板があり、ふんだんにICT機器を使っている。その後も何学年か参観し、校長先生方とミーティングの時間をとった。学校を去る際に、お昼の時間になり、教室の方から、子どもの特有の高い声が聞こえてきた。帰り際も照れながら私たちに無邪気に手を振る子どもも見受けられた。子どものかわいらしさは、万国共通だと感じ、うれしくなった。

また、午後は職業教育センターを見学した。日本で言う小、中、高、大学生を集めて、職業教育の訓練をしている施設。およそ12,000人が通い、すべて無償。スケールが桁外れである。ここでは発表大会に向けてのコーラ



チをするのがよいか考え、アウトプットしていくことだと感じた。今できることを推進するにあたり、原動力となる視察となった。改めて、この企画の継続を願う。

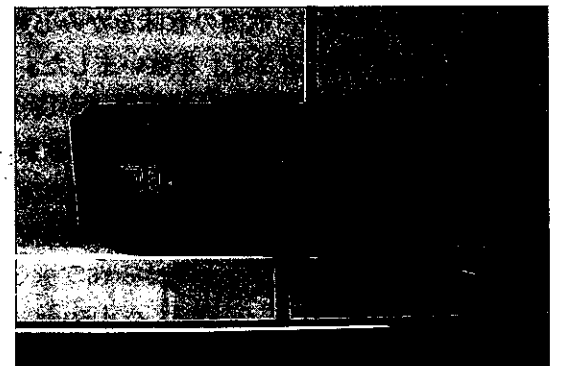
“はばかり”教育考

東京教組 佐谷 修

私が子どもだった頃、公園や駅の公衆トイレは臭く、息を止めて入ったものだった。大人になるにつれ、そのようなトイレはどんどんなくなっていった。学生時代アジアを旅していると、そんなトイレに出くわすことが多々あった。30年ほど前の中国を旅した時も、トイレの違いに経済水準の差が現れていると感じたものだった。

原体験というのは強く頭に残ってしまうものである。特に、外国であれば実際に赴くことが少なく、過去のイメージが固定化されてしまいがちである。頭の中では経済発展をしていると考えながらも、トイレが紹介されることなどほとんどないため、私のイメージは古いままであった。

北京空港に着いた瞬間から、私の古い考えは刷新された。空港のトイレは清潔に管理されているだけでなく、入り口の男女表示が色分けされていなかった。色分けしていないことで無意識のジェンダーバイアスの再生産を防ぐことにもつながっている。公園などにある公衆トイレは、多目的トイレが当たり前のようにあった。トイレひとつとっても、中国の文化・経済的な変容を目の当たりにすることができた。



では、学校はどうなのだろう。学校に着く前は、最先端モデルのような学校に行くとはばかり思っていた。訪問した山咀頭小学校は、まさに農村部の学校であった。門や校舎、掲示板などは綺麗に塗られていて、学校を大切にしようとしている様子が、外からでもよくわかった。

校舎内もよく整えられていて、子どもたちは真剣に話を聞きながら授業を受けていた。黒板(ホワイトボード)は開閉式になっていて、開けると電子黒板があり、当たり前のように電子黒板を使っていた。中国のICTの



発展は凄まじいものだと聞き驚いていたが、農村部でも当たり前のように使えるようになっているのがとても興味深く感じた。

その一方で、校舎内にトイレはなく、門のすぐそばに独立して設置されていた。薄暗く、いわゆるぼっこん便所だった。

日本でも電子黒板が整備されているが、トイレが古く薄暗いままだったり、校庭の遊具が錆だらけだったりする。新しい技術には予算が投入されるが、子どもの生活に関わることは後回しにされがちなのはどうも変わらないのだと感じさせられた。

とはいえ、社会は30年で大きく変わったし、次の30年で日本も中国もさらに変化をしていくだろう。きっと、日中両国の学校は子どもにとってよりよいものになっているのだろうと思うと、ぜひまた訪問したい。

研修報告（感想文）

神奈川県 北村 智之

2010年10月の北京市・易県への視察、2014年9月の上海市・南京市への視察に続いて、私自身、3度目の中国国際教育交流協会視察研修訪中団への参加でした。15年前の訪中時と比較し、衝撃を受けた点について、報告させていただきます。

1つ目は、北京市の「環境」や「人々の生活」の変化についてです。北京市の空気がとてもきれいで澄んでいました。国策としてSDGsにとりくみ、市内に立地していた工場のほとんどは郊外へ移転、自動車はガソリン車から電気自動車へ、バイクにいたっては電動バイクしか存在しない。これらにより、大気汚染はなくなったそうです。また、人々は、現金を全く使用していませんでした。北京市はもちろん、阜平県においても、現金を使える場所が全くありませんでした。「施策など進むべき方向性を決めると、短期間で国全体がその方向へ進む」のが、中国のすごさだと改めて実感させられました。

2つ目は、学校教育での「音楽の授業」と「自主的な活動」についてです。

15年前に易県の小学校で、音楽の授業を参観しました。子どもたちは、軍歌のような勇ましい曲を大声を張り上げて一生懸命歌っていました。中国の音楽の授業では、大声で歌を歌うのが普通だと聞きました。授業の後半は、私たち訪中団が、歌詞の意味をかみしめて歌う授業を展開し、最後に、訪中団と中国の子どもたちでいっしょに、日本の「ふるさと」を歌いました。歌詞の意味をどの程度理解してくれたのかはわかりませんが、その歌声は、「ふるさと」の歌詞にぴったりの歌声でした。今回、参観させていただいた岐平県山咀頭小学校合唱団の歌声は、聞き入ってしまうほど素敵な歌声でした。音楽の授業への考え方が明らかに変わっていました。岐平県教育体育局の方からは、毎週1回、先生方は研修を受けて音楽の授業改善にとりくんでいると聞きました。また、中国の小学校では、2022年以降、週2日、15時～17時をサークルの時間として「自主的な活動」を行っています。



今回参観した山咀頭小学校合唱団も「自主的な活動」として、とりくまれています。私の中国に対する認識では、（偏見かもしれませんが）個人の自主性は、中国国内においては存在しないと思っていましたので、「自主的な活動」を中国全土の小学校において行っていることに大きな衝撃を受けました。教育分野でも、「施策など進むべき方向性を決めると、短期間で国全体がその方向へ進む」のが、中国のすごさだとここでも実感させられました。

3度も視察研修において学ぶ機会を与えてくださり、どうもありがとうございました。

「視察研修に参加して」

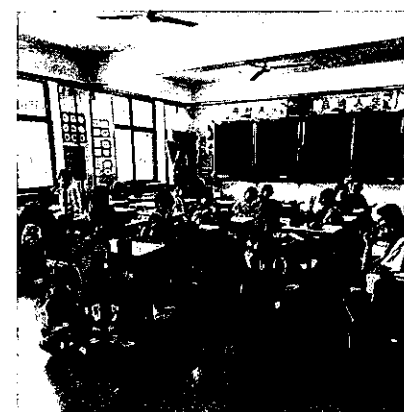
横浜市 石高 睦月

日本の基盤を築き上げた要素の多くには、中国が起源となっているものが多い。小学生の頃、子ども向けの歴史の書物を読み、漢字や仏教、稲作など、多くの文化や技術が中国から伝来され、今に繋がっていることに驚くとともに深く感心した記憶がある。とはいえ、自分にとって中国は、『近くて遠い国』という印象のままであった。しかし、現在自分が居住する横浜市には、外国にルーツのある人々が多く住んでおり、外国人人口の約4割が中国出身者である。地域によっては、外国籍の児童生徒が多く通っている学校もある。そのような環境下で働く身の上としては、今回訪中する機会を得られたことはまたとない好機であった。特に印象に残ったことを中心に記したいと思う。



初日、冷や汗をかきながらの入国審査を終えた後、宿泊先に併設している『宋慶齡青少年科学文化センター』を見学した。子どもたちの知的好奇心が刺激されるような展示物などは、大人の私にとっても興味が沸き立つものであった。その後、宋慶齡基金会へ表敬訪問の際には、宋慶齡に関する資料展示を見学した。時代背景的にも当時の女性としても、十分な教育を受け海外留学をされていたことに驚くとともに、その人生の大半を子ども達の健やかなる育成のために捧げられたことは、ただ尊敬するばかりであった。「子ども達は私たちの未来であり、私たちの希望です。私たちは子ども達に最も貴重なものを与え続けます」という宋慶齡の言葉があるが、これは現在の『子どもの権利条約』にも繋がっているように感じた。

二日目には、阜平県へ移動し、白河小学校を視察した。学校のつくりが日本と違うことには驚く部分もあったが、何より驚いたのは授業中とランチ中の子ども達の差であった。授業中は、どの学年の子どもも誰ひとり私語をすることもなく真剣な表情であったが、ランチ中はこちらが声をかけると屈託のない笑顔でカメラに収めてくれた。その驚きを後で質問すると、「オンとオフについての教育を受けている」という話であった。職業技術教育センターにおいては、パネル展示の中に「抗日運動」と表記されているものがあった。過去の歴史の中で起こった事実として、全ての言葉は理解できなくとも直視する必要があると感じパネルに向かったが、センターの



先生に別の展示へとさりげなく誘導されてしまった。残念と思いはしたが、視察としてやってきた我々に対し、気を使ってくださったのであろう。私はそれを優しさだと今でも受け止めている。

視察以外の場でも、基金会の方達との晚餐会や立ち寄ったショッピングモールなどで人々の笑顔や優しさに触れることができた。天安門広場や故宮の雄大さには圧倒されるばかりであった。ご飯は何を頂いても美味しかった。歴史については、まだまだ学ばねばならぬことだらけであるが、事実を受け止め真摯に向き合う事が必要であると思う。私にとって『近くて遠い国』は、『近くてもっと近づきたい国』へと変わった視察研修であった。

変わる街並み、変わらぬ温もり ～三たび訪れた隣国での再発見～

川崎市 石村 卓也

3泊4日という限られた日程ではありましたが、私にとっては一日一日の刻みが非常に濃密で、多くの学びと再発見に満ちた充実の視察研修となりました。訪問先で出会う景色や人々の熱気に触れるたび、現地の教育や文化を「知識」としてではなく、「体感」として理解する貴重な機会となりました。

数ある行程の中でも、河北省阜平県の小学校を訪れたひとときは、今回の研修のハイライトとして私の心に深く刻まれています。全校児童200人に満たない小さな学校でしたが、校内には子どもたちの弾けるような笑い声が響き、そこかしこに温かく活気に満ちた空気が流れていました。特に印象的だったのは、全学年の児童が参加した音楽の授業です。1年生から6年生までが同じ教室に集い、上級生が下級生の手を優しく引き、自然に寄り添いながら活動する姿には、現代の効率化された教育が忘れかけている「家族的な絆」と、地域に根ざした教育の豊かさを強く感じずにはいられませんでした。授業のクライマックス、子どもたちは私たちへの歓迎として、千昌夫さんの「北国の春」を合唱してくれました。表情豊かに歌い上げるその姿に、私は思わず目頭が熱くなりました。言葉の壁はあっても、音楽を通じて心が溶け合い、一つになる。その純粋な歌声と笑顔は、今も私の記憶の中で鮮やかな色彩を放っています。



私にとって中国は、かつて2015年から3年間、蘇州日本人学校に勤務したゆかりの深い地でもあります。当時の教育現場での経験を土台にしつつ、今回の視察を通じて、中国教育の「今」と「変わらぬ本質」を多角的に見つめ直すことができました。また、1996年、高校の修学旅行で初めて北京の地を踏んでから、およそ30年。再訪



した街並みは、かつての面影を探すのが難しいほど劇的な進化を遂げていました。しかし、最新鋭のデジタル技術やそびえ立つ高層ビルに囲まれても、そこに暮らす人々の懐の深さ、根底に流れる温もりは少しも変わっていませんでした。その普遍的な優しさに触れ、私は深い安堵を覚えました。中国は、私の娘が産声を上げた場所でもあります。いつか娘と共にこの地を訪れる日を夢見ながら、今回の経験を一生の宝物とし、親子で日中友好の架け橋となれるよう、教育者として、また一人の人間として一歩ずつ歩んでいきたいと決意を新たにしています。

日中国際教育交流協会の視察の感想

富山県 門廻 宏昭

今回の日中国際教育交流協会の視察では、3泊4日の日程で、北京市、阜平県を視察させていただいた。

一日目に北京市内で中国宋慶齡基金会表敬訪問・宋慶齡故居見学を行った。恥ずかしながらこの視察に参加するまで、日中国際教育交流協会がどのような活動を行っているのかをよく理解していなかった。中国宋慶齡基金会と交流があり、中国の学校等へ寄付を行っていることを知ることができた。宋慶齡故居見学では、中国名誉国家主席である宋慶齡の人物や偉業について知ることができた。特に政治家としての活動以外にも、教育への関心が高く、基金会を設立し農村部の教育の発展にとりこんでいたことを学ぶことができた。宋慶齡基金会の副主席との会談では、普段は展示のみである歴史ある椅子に座らせていただきながら会談していただくなど、宋慶齡基金会の大きな歓迎に驚くばかりであった。

二日目には、バスで阜平県へ移動し、阜平県の「山咀希望学校」を見学した。阜平県教育委員会との教育交流も行った。「山咀希望学校」は財政的に恵まれていない学校であり、校舎やトイレなども古く、安全性や衛生的にも課題があるように見えた。訪問すると子どもたちが歓迎の合唱発表してくれた。合唱曲の一つは日本の曲であり、今回の私たちの訪問のために練習してくれたのかと思うととても感激した。日中国際教育交流協会の寄付により購入した真新しいドラムセットも2台あり、校長がとても感謝をしていたことが印象的だった。「山咀希望学校」は1クラスに20人ほどの児童がおり、みな着座して授業にとりこんでいた。また昼食時には児童たちだけで給食を食べており、教師は職員室で食事をしていること、グラウンドはなく校舎前にある校庭が児童の活動場所になっていることなど日本との違いに驚いた。児童たちはとても生き生きとしており、笑顔が多く観察され、財政的には恵まれていないが、この学校の子どもたちは豊かな心が育っているように見えた。日本のゆとりない教育が教師やこどもたちから笑顔を奪っている状況を考えると、財政的に恵まれなくとも少人数でのびのびと学べる教育環境は教師やこどもにたちにとって良い環境なのかもしれないと感じられた。

その後、職業技術教育センターへ移動し、「国管局支援30周年展示館」「教育扶貧展示館」「自動車訓練棟」等を見学した。職業技術教育センターは、「貧困からの脱出」を目標に中国政府が資金を提供し、協賛企業と協力しながら働くための技術を身に付けるための学校である。日本の専門学校や大学のような学校であるように感じた。「国管局支援30周年展示館」「教育扶貧展示館」では政府の支援や企業の協力により、多くの子どもたちが「貧困から脱出」できたことが展示されていた。マランカ合唱団については、農村部の子どもたちがマランカ合唱団に参加することで、「貧困から脱出」できたとし、設立者である鄧小欄先生を賞賛する内容が展示されていた。また、学生による軽音楽、合唱、民族楽器での演奏、和太鼓での演奏が披露された。民族楽器の演奏に使わ



れた「ヤンキン（揚琴）」は、日本中国国際教育交流会の寄付により購入されたものであり、日本中国国際交流会の活動が中国の子どもたちの教育に貢献していることを実感できた。

三日目には、北京市へ戻り人民大講堂、天安門広場、故宮（紫禁城）を見学した。日本の国会にあたる人民大講堂では、全国人民代表大会が開催される場所や各市からの代表者らが待機する部屋などを見学した。天安門広場では、毛沢東の肖像画が中央に掲げられ「中華人民共和国万歳」「世界人民大団結万歳」と書かれた天安門の大きさに驚いた。故宮（紫禁城）では、広大な敷地に大きな堀や門が数多くあり、中国皇帝の権力と財力を肌で感じる事ができた。

3泊4日の視察では、日中国際教育交流協会の果たしてきた役割、宋慶齡基金会との交流の歴史、中国の教育政策や農村部の学校の実態等を学ぶことができた。特に同じ教育者として子どもたちの幸せのために、国や教員がどのようなとりくみをしているのかを実際に見ることができたことは、私の今後の教員生活に大きな糧となると思う。今回の視察の機会を与えてくれた多くの方々に感謝いたします。

視察研修に参加して

福井県 谷口 倫章

バス移動中などに見た北京の街は近代的で、正に「首都」。道行く車は「電動」が多く、過去に報じられていた「大気汚染」は全く感じられなかった。2008年北京オリンピック時に環境が大きく変わったとの説明を聞いて、国を挙げた対策の威力を感じた。

また、「宋慶齡青少年科学文化交流センター」と「阜平県職業技術教育センター」の視察では、若者たちの「科学分野」への関心を高め、確かな技術を学ばせることで、社会の発展につなげるというねらいが感じられた。そして、それは政策でもあるのだと私は理解した。施設・設備からも相当な予算が投入されていることが推察され、若者たちは恵まれた環境で学んでいると感じた。

一方、阜平県で訪問した小学校では、学校周辺の環境や校舎等に北京市街との格差を感じた。現地の教育委員会等も「都市部と農村部との経済格差が課題」としており、教育の質の向上に努めている旨の説明を受けた。改めて、どんな地域・家庭の子どもも同等の教育を受けられる条件整備をすることの大切さを感じた。

話はそれるが、帰国後、東京駅で福井に戻る新幹線を待っていると、隣に並んだ女性から「中国、行ってきませんか？」と声をかけられた。どうやら、私が持っていた土産物袋を見てのことらしいが、聞けばその方、



北京在住およそ20年、国慶節の休暇を利用して出身地の富山へ久々に帰省する途中とのこと。ほんの数分ではあったが、近年の日中双方の「気候」「政治」「教育」について、ホーム上で「意見交換」をした。彼女の話で印象に残ったのは「中国は何事にもスピード感がある」という言葉である。「インフラ整備」や「デジタル化」をはじめとして、市民が変化や効果を実感するのが、日本に比べてとても早いということであった。政治体制の違いによるところが大きいのだと思うが、北京の街の変化は正にこれに当てはまるのであろう。ぜひ、教育の地域間格差の解消にも生かされることを期待したいと思った。

今回、研修に参加させていただいたことで、教育交流の意義と、「日本中国国際教育交流協会」がこれまで果たしてきた役割について、理解を深めることができた。たいへん貴重な4日間であった。

つながること、つなげること

山梨県 嶋田 拓郎

人生で初めてとなる海外への旅行が今回の日中国際交流協会の中国への視察研修であった。パスポートの申請から、身支度まで不安と期待に胸を膨らませ、羽田空港へと向かった。今回の研修とともに訪中をし、つながることができた他県の方々とのご縁は自分にとって本当に大切なものである。貴重な機会をいただいた日中国際交流協会の皆様には感謝の念に堪えない。出国審査があんなに大変なものだということも、英語で想いを伝えることの大変さも、買い物をして支払いをすること一つをとっても、日本に留まっているだけでは体験できない貴重な時間であった。



中国での研修は寝食に渡りたいへん有意義な時間であった。特に阜平県での学校訪問での子どもたちの様子や先生方の教育に対する熱量や想いに触れることができ、私自身も刺激を与えていただいた。子どもたちの笑顔は世界中で変わらない尊いものであるということも再認識できたし、国をあげて教育を教育に予算をつけ、学校施設が一番良い施設となっているということにも感銘を受けた。合唱を歌って迎えてくれた子どもたちの姿や給食中の姿、授業での姿に、休み時間に走って外に向かう姿…。子どもたちがいきいきと

生活、活動する学校はどういう場所であるべきか、改めて施設設備を充実させることの大切さとともにそれを支える教職員の想いや勤勉さ、国として教育をどう考えるべきなのかということに想いを巡らすことができた。

「教育は心をつなぎ、世界をつなぐ」「人と人との交流を通して教育力を高める」視察研阜平県教育技術センターを視察中に職員の方が語っていたことである。壁には貧困から脱却した子どもたちの笑顔の写真が飾られていた。「国管局の努力無くして、貧困からの脱却は無かった」という言葉からもわかるように様々な方々の支援があって中国での教育は成り立っている。それは日本でも同じである。当たり前を感じていることに対する感謝の気持ちをもつことの大切さを改めて実感した。

教育によって人と人同士がつながり、世界をつなぐことができる。先人たちがつないでくれたものをいかに未来につなげるか、私たちの責任は大きい。お互いの想いに寄り添って、つながることができる世界を子どもたちに残していかなければならない。世界中の子どもたちは教育によって心からつながることができる。教育が心をつなげることができる。と信じて、今後も教育活動と向き合っていきたい。



世界共通のもの

静岡県 館 一徹

ご縁があって日中国際交流協会の視察研修訪中団に参加させていただいた。個人的には初の訪中であり、期待と不安が入り混じる中での参加であったが、名簿に何人かのお名前を見つけて事前に情報交換でき、少し安心もしながら当日を迎えた。

北京空港で宋慶齡財団の方々が迎えてくださり視察がスタートしたが、最初から最後まで、至る所で感謝の言葉や手厚いおもてなしをいただき、日中国際交流協会が果たしてきた役割や交流が積み重ねてきたものの大きさを肌で感じる事ができた。

視察の中で最も印象に残ったことは、やはり子どもたちの姿である。今回、視察したのは、いわゆる貧困対策の重点地域となっている小学校であった。施設・環境面が特段に優れているわけではないが、子どもたちは整然と静かに学んでいた。きちんと先生の話聞き、低学年でも姿勢正しくノートを取る姿には感心した。見学しているうちに給食になったが、そこでも子どもたちは自主的にルールを守って食べていた。日本の、というより自分の学級の給食の様子と比べると、(もう少し子どもらしくてもいいのになあ)と、一抹の寂しさを感じてしまう

ほど行儀がよかった。

そんな子どもたちが本領を発揮してくれたのは、正門付近で記念撮影をして帰ろうとした時であった。何人かの子どもたちが駆け寄って来てくれた。日本のアニメTシャツを着ている子が多く、そのアニメの名前を出すと大喜びしていた。ジェスチャーで反応しただけで笑顔がはじけ、最初は数人だったはずが、いつの間にか多くの子どもたちが輪になっていた。学校現場が懐かしかったこともあり、つい長居をしてご迷惑をおかけしたことを反省している。ただ、少し前の教室での様子との違いにどこか安心し、授業中とそれ以外の、いわゆるオンとオフをきちんと区別できていることに感心した。子どもらしさは日本と変わらないことや、笑顔はおそらく世界共通であることを実感できた。この子どもたちが、互いを尊重し、理解し、支え合う未来をつくっていつてくれることを願うばかりである。

阜平県教育技術センターでは、学んでいる学生の熱意を感じた。確かに素晴らしい環境ではあったが、この環境で学んでいることに対する感謝の気持ちが伝わってきた。当然、私たちも手厚く迎えていただいた。日本とは状況が異なるので一概に比較できないが、すべての子の学びや職業選択権を保障しようとしている国策については感銘した。子どもの権利条約にある「学ぶ権利」や「職業選択の権利」は、当然、世界共通である。そのことを頭では分かっている、このような機会のおかげで実感することができた。私はもちろん、日本の子どもたちには、学べることや選択できることのありがたさを忘れないでもらいたいと願う。



訪中に際し、財団の方々はもちろん、阜平県のスーパーの店員さんまで、本当に皆さんに親切・丁寧に接していただいた。何より、財団と日中国際交流協会が長年築き上げてきた信頼関係はゆるぎのないものであった。国際情勢は様々だが、人と人との関わりはそれとは無関係のかけがえのないものである。相互扶助の精神も世界共通であることを願いたい。多くの気づきを与えてくださった今回の視察に際し、ご尽力いただいた理事長・事務局長様はじめ皆様に、心より感謝申し上げます。

訪中国で学んだこと

愛知県 松崎 大河

わたしは今回の視察研修で、子どもたちの笑顔を守ること・笑顔をつくることの大切さをあらためて感じた。

初日は、北京にある宋慶齡基金協会を訪問し『中国宋慶齡青少年科学技術文化交流センター』を見学させていただいた。そこはまるで科学館だが科学館の域にとどまらない、壮大な教育施設であった。1フロアでものづくり・宇宙工学など子どもたちがさまざまなブースで自由に体験・学習することができたり、幼児教育に特化したゾーンがあったりするなど、9階に渡る巨大な教育施設であった。この施設は宋慶齡基金協会が社会教育のために建設し、平日は多くの小中学校が団体参加として、土日は学生が自由に来ることのできる施設になっており、協会が教育にかける想いを感じるとともに、この場所で子どもたちが笑顔で遊び、自然に学びを深める姿が想像できた。

2日目は河北省阜平県に行き、農村部の小学校と教育センターを視察した。この地域は農村地区が多く、もとも貧困県であったが、「貧困撲滅」を掲げた国の支援により見事脱却できた県であった。小・中・高・職業訓練校すべての要素を兼ね備えた教育センターでは、児童生徒がのびのびと活動する姿が見られた。日本の大学以上の広大な敷地に、体育館・運動場・寮を含めた“集合的な学校”であり、これが国の全額支援で運営されていることに驚いた。

また農村地区の小学校視察では、国の支援により埋め込み型の電子黒板が複数教室に設置されており、基金会の支援により楽器等が整備され、いわゆる部活動的な活動の合唱が盛んになっていた。昼食も無償化され、子どもたちは笑顔で食事をとっていた。国境を越えても、子どもの笑顔に変わりはなく素敵であった。県内の他の山間部学校の話聞いても、基金会からの支援により「児童の家」を設立することができ、留守児童が笑顔で過ご

すことができていると話をつかかった。貧富の格差があっても、すべての子どもたちの笑顔を守ろうと国が率先して動いていることに感銘を受けた。今の日本でこのような国策がとられることは考えにくいですが、少しでも、すべての子どもたちの笑顔をつくるために自分になにができるのか、考えるきっかけとなった。

『教育は未来を変える力がある』

教育センターの方のお言葉に強く同感し、そしてそこに「子どもの笑顔」を忘れないように、今後の自分の活動に活かしたいと強く感じた。



「子どもの姿」を通してつながるということ

三重県 出口恵梨子

視察研修訪中団の一員としてはじめて中国を訪問した。ここでの4日間はさまざまな「出あい」とともに、そこにある“思い”にふれる貴重な経験をさせてもらえたものとなった。

今回の視察で北京の中心地から3時間半ほどかけて、阜平県にある小学校を訪問した。学校の周りは広大な山と畑がひろがっており、かつて貧困地区として習近平国家主席が何度も訪れたことのある地域とはどのようなようすなのかと思ひながら町並みを眺めていた。

学校に入ると、黒板には埋め込まれた電子黒板があり、きれいな机や椅子などもある。社会全体で子どもたちの「教育」をまもるため、環境整備にしっかりととりくんでいることを感じた。教室を覗くと、少し恥ずかしそうにはにかみながらも黒板を見つめて勉強をしている子どもたちがいた。「学校」という場所はどここの国においても共通する雰囲気があると感じるとともに、あふれんばかりの子どもたちの笑顔を見てみると、子どもはほんとうに世界規模の「宝」だなと感じた。学校長からは都市部と農村部で格差があり、今後農村の発展は課題となっているという話があった。教育の質をあげることで教育格差の解消につなげていることや、企業と学校の提携、ICTの活用などさまざまなとりくみを聞かせてもらった。日本でも子どもの数が全国的に減ってきており、複式学級や統廃合など学校の規模と配置についての議論はどの地域でもおこなわれているので、自分たちの国や地域でも共通していること、とりいれていけることを考えていた。

授業を参観させてもらったあと、会議室に移動しているときに、教室から日本の有名なJ-POPの音色が聞こえてきた。子どもたちの歌声に引きよせられるように教室に戻ってしまった。子どもたちと話したいと思ったが、時間がなかったことと歌っている最中だったため声をかけることはできなかったことは残念だったが、中国語で歌う日本の歌を聞かせてくれたことが、なんだか心を通わせあえたような気持ちになりうれしかった。今回のような視察ももちろん大切だが、以前までおこなわれていた授業交換やホームステイなどの子どもたちの姿をもとにしたがいのことを語りあう教育交流活動についても再開されていくことを願う。子どもたちが安心して未来にすすむことができるよう、「子どもの姿」を出発点として交流をするこのつながりを今後も大切にしていきたい。



□ 教育交流・受入事業

「教育交流プロジェクト」の実施計画の中で、今まで易県や東平県で行い、実績を上げてきた音楽教育を中心とする教育交流を柱として、「第6次宋慶齡基金会教育交流代表団」の受け入れについて検討していくことになりました。本年度9月に実施された視察研修訪中団と保定市阜平県及び体育教育局との話し合いの中で、訪日代表団の派遣・受入を実現させるべく確認されました。

□ 教育交流・支援事業

◇河北省保定市阜平県音楽教育支援

新たな「教育交流プロジェクト」の初年度として、河北省保定市阜平県への音楽教育支援を行いました。支援の規模としては、過去の取り組みと同じように、100万円／年で行っていくこととしました。

(1) 2025年度教育支援に関する協定書

LEGAL DOCUMENT

協定書

宋基金法字(2025)122号

甲方：公益財団法人日本中国国際教育交流協会

法定代表者：中村武志

連絡先：赤岡直人

電話番号：0081-55-269-6533

メールアドレス：info@ajciee.or.jp

住所：400-0031 日本国山梨県甲府市丸の内 2-32-16 甲府丸の内マンション 302

乙方：中国宋慶齡基金会

法定代表者：李安晋

連絡先：王璐璐

電話番号：0086-10-86601941

メールアドレス：wangll@scif.org

住所：中華人民共和国北京市東城区東安門大街 82 号院

甲方公益財団法人日本中国国際教育交流協会と乙方中国宋慶齡基金会は、日中両国の友好を促進するため、特に中国で経済発展途上地域の学校教育条件を改善し、またより多くの子どもに教育を受ける機会を提供するため、今後共同の活動領域において互いに協力していくことで合意した。こうした目的を達成するため、以下の協定を結ぶ。

第一条（目的及び用途）

LEGAL DOCUMENT

甲方は、中国河北省保定市阜平县の学校に対する音楽教育支援を乙方を通して行う。これによって音楽教育環境を改善し、水準を向上させる。

第二条（寄付及び総括報告）

- 2025 年、甲方は中国河北省保定市阜平县の職業技術教育にかかわる音楽教育条件・教育レベルを改善するために 100 万円を寄付する。
- 甲方は 2025 年 9 月 30 日前に 100 万日本円を乙方の指定口座に振り込む。乙方は振込を受け次第、100 万日本円を河北省保定市阜平县教育体育局に送り、当地職業技術教育の振興に使う。
- 乙方は 2026 年 2 月 28 日までに、実施報告（具体的プロジェクトの実施内容、決算を含む）を甲方に提出する。

第三条 争議解決案と適用法律

- 本契約の締結、履行および解釈並びに紛争の解決は、中国（香港、マカオ、台湾地区を除く）の法令に準拠する。
- 契約の履行過程において生じるいかなる紛争について、双方はまず友好的に協議する。協議が不調に終わった場合、いずれかの当事者は北京仲裁委員会に仲裁を申し立てることができ、当該委員会の現行有効な仲裁規則に従って仲裁を行う。仲裁の裁定は最終的なものであり、双方に対して拘束力を持つ。

第四条 その他

- 双方は以上の協定に同意し、この協定を日本語と中国語共に各六部を作成し、双方の代表が署名捺印の上、それぞれ三部を保存するものとする。中文版と

LEGAL DOCUMENT

日本語版に不一致がある場合、中文版を優先するものとする。

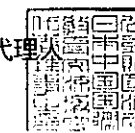
- 本契約に定めのない事項については、双方で別途協議の上解決し、合意事項は補足契約の形で確認されるものとする。
- 本契約は双方が署名捺印した日から効力を発生する。

甲方(捺印):

法定代表人或いは授權代理人

(サイン):

中村武志
2025 年 9 月 25 日



乙方(捺印):

法定代表人或いは授權代理人

(サイン):

2025 年 9 月 5 日

